

## 『相思樹』小考 — 台湾最初の俳誌をめぐる —

沈 美雪

はじめに

- 第1節 前期『相思樹』（香墨主筆時代）
  - 第2節 岩田鳴球の來台と竹風吟壇の分裂
  - 第3節 後期『相思樹』（鳴球主筆時代）
  - 第4節 『相思樹』の終焉
- おわりに

（要約）

『相思樹』は明治37年（1904）に台湾の台北で創刊された最初の台湾俳誌である。『相思樹』の発刊は台湾の新派俳人に作品発表の場を与えただけではなく、俳人の俳句研究に対する意欲をも刺激し、台湾における俳句の発展に大きな影響を与えた。しかし岩田鳴球の來台後に『相思樹』陣営は分裂し、鳴球に反感を覚えて『相思樹』を離れた俳人は新たに句会を起し、『相思樹』と対立するようになった。台湾句会を草創し、無数の俳人を育てた渡辺香墨、岩田鳴球、小林李坪等はすべて『相思樹』と深い関わりを持つ俳人であり、その発刊により台湾俳句は大きな一歩を踏み出したといえる。

本稿は、『相思樹』の創刊から廃刊に至るまでの軌跡を追い、当時の台湾俳句の内容を検討し、明治期の台湾俳壇における『相思樹』の位置付けを考察したものである。

はじめに

近代俳句革新の祖とされる正岡子規は明治25年（1892）に新聞『日本』に入社し、「瀬祭書屋俳話」を執筆して俳句の独立を説いた。子規の主張に賛同し、新俳句を試みた俳人たちは「日本派」と称され、また旧派の俳諧に対しては「新派」とも呼ばれた。

台湾は明治28年（1895）に清国より日本に割譲され、日本最初の海外領土となった。台湾に移住した内地人（日本人）の間には、子規の俳句革新の気運に関心を持つ俳人がかなりいることが、明治30年（1897）に創刊された俳誌『ホトトギス』から明らかとなった。さらにその翌年より『ホトトギス』に台湾在住の俳人の投句も見られるようになった。これは俳句が台湾の風土に根を下ろし始めたことを意味している。

明治35年（1902）4月に村上玉吉（神洲）を主幹とした文芸雑誌『台湾文芸』が刊行された<sup>1</sup>。

『台湾文芸』は俳句専門誌ではないが、俳句を主とし短歌小品その他を掲げた。その発行は長く続かず、同年の9月に第5号をもって発刊停止となった。その2年後の明治37年（1904）の『ホトトギス』6月号巻末の新刊紹介に、一つの俳誌情報が紹介された。台湾の新派俳人によって創刊された『相思樹』である。『相思樹』はホトトギス系の結社「竹風吟壇」の同人を主体として明治37年（1904）5月15日に発行された俳誌で、創刊号は菊版16頁の小冊子であった。

『相思樹』は日本の植民地となった台湾から発行された最初の本格的俳誌として近代俳句史に新しい一頁を刻むものとなった。しかし『相思樹』の史的意義は多大なものであるにも関わらず、それについての論説は、島田謹二の「正岡子規と渡辺香墨」「続香墨論」（『華麗島文学志—日本詩人の台湾体験—<sup>2</sup>』所収）、阿部誠文の「台湾俳壇史」（俳誌『燕巢』にて1999年より連載）

に言及がある程度である。『相思樹』の沿革変遷を調査し、その影響と重要性を論述した研究は殆ど見当たらないというのが現状である。『相思樹』創刊当初の主筆を務めた渡辺香墨<sup>3</sup>は初期の台湾俳壇の基礎を作った一人であり、彼の台湾での文学活動は島田謹二の上述の論文で詳細に論述されている。また阿部誠文の「台湾俳壇史」は『ホトトギス』に発表された台湾俳人の作品を取り上げ、句評を加えたものである。

本稿では、上記の研究を踏まえ、『相思樹』の成立とその発展を明らかにした上で、その代表俳人の主張や作品の特色を検証し、明治末期の台湾における俳句の展開を論じたい。

## 第1節 前期『相思樹』（香墨主筆時代）

### 1. 『相思樹』の成立背景

『相思樹』の母胎は、台北の「竹風吟壇」という俳句結社である。新派俳人は明治35（1902）以来『台湾民報<sup>4</sup>』を中心に投句を続けていたが、明治37年（1904）に『台湾民報』が発行停止となり、拠り所を失った新派俳人は俳句中心の文芸雑誌の発刊を決意した。誌名として香墨の提案した「相思樹」が採用された。相思樹はその閑雅な姿から行道の並木あるいは鑑賞として至る所に植栽され、南国的情趣の溢れる植物として台湾の俳人に愛されている。

『相思樹』編集者の服部烏亭の「寄空鳥《上》」によると、創刊の発起者は堀尾空鳥、田内芋作、加藤申衣、蝸居（本名不詳）、服部烏亭の五人である。その他に竹風吟壇時代からの古参には、みの作、落水、稲城、天涯（法経堂）、李坪（本名小林里平、『台湾歳時記』の著者）、『相思樹』発刊以降は山田不耳、藤井烏榎、庄司瓦全などが加わった<sup>5</sup>。有力同人は上記の他に基隆の吉川五平太<sup>6</sup>や、金瓜石の渡辺風山堂などがいた。新派の一致団結を示す『相思樹』の発行により、台湾俳句は一步前進することができたと言える。

『相思樹』はその主筆と傾向により、前期（渡辺香墨主筆時代）と後期（岩田鳴球<sup>7</sup>主筆時代）に大別できる。以下、『相思樹』の成立より廃刊までの歩みと明治期の台湾俳句界における『相思樹』の役割を論じたい。

### 2. 旧派に対抗する新勢力の形成と地方句会の扶植

前期『相思樹』の主筆となったのは渡辺香墨である。彼は小林李坪と共に当季雑詠の選者として発刊当初の『相思樹』を支えた。香墨は明治32年（1899）12月に台湾総督府法院検察官になり、翌年1月に台湾に赴任し、明治39年（1906）2月に離台するまで台湾で6年余りを過ごした<sup>8</sup>。小林李坪は埼玉の出身で、本名は里平、李坪は本名に因んだ俳号である。台湾固有の習俗を調査する「台湾慣習調査会」に所属し、また総督府管轄の台北地方法院の書記官も兼任していた。「南蛮会<sup>9</sup>」「竹風吟壇」に参加し、明治40年（1907）に緑珊瑚会を創立し、明治末期まで俳壇をリードした。著書に『台湾年表』（伊能嘉矩との共著、琳瑯書屋、明治35年出版）、『台湾歳時記』（政教社、明治43年出版）などがある。二人は共に正岡子規の教えを受けた日本派の俳人であり、渡台後は多くの俳人を育て、初期の台湾俳壇の発展に大きく貢献した。

子規の俳句革新に賛同した新派勢力は『相思樹』の創刊によって、ようやく「日々俳壇」を根城とする旧派と対抗する力を獲得した。「日々俳壇」は『台湾日日新報』の俳句欄で、その選者は同新聞社の記者でもある旧派宗匠の残夢庵高橋窓雨<sup>10</sup>が務めていた。窓雨は明治30年（1897）6月に渡台し、明治31年（1898）に『台湾日日新報』が発刊されて以来、同紙の俳句欄の選句をし、多くの同士を募って初期の台湾俳壇における一大勢力を作った。当時の台湾俳壇について、島田謹二は、『相思樹』同人が創刊初期において窓雨一派を主とする「日々俳壇」と正面衝突し、激烈な筆戦を交わしたと記している。また窓雨一派の通弊として、平気で盗句をやっていたとも書いている<sup>11</sup>。

このように相思樹同人は俳句研究に力を注ぎ、窓雨を中心とする旧派俳人を批判する一方、俳人の育成や地方句会の扶植にも大きな役割を果たした。例えば指導役の渡辺香墨は初期の台湾生活において熱心に句会に参加し、俳人の指導や地方句会の選句などを行った。彼は明治34年（1901）1月に台中、明治37年（1904）3月に台南に転勤し、その度に指導者として句会に臨み、地方句会の発展に尽力した。しかし地方句会の多くは香墨の指導により新風に目を向けるようになったものの、指導者を失ってからは再び旧派の勢力に支配されるようになった。たとえば北鳴は「台南俳句界」において香墨の去った後の台南俳壇について次のように述べた。

俳句側に於ては目下香風俳壇なる組織ありて多くは蕉門一派の系統を帯び居れる爲め作句としては甚しく嶄新なるものなし之れに對抗して起たんとする所謂新派なる一味者なきにあらずと雖も曩に渡邊香墨を同地より失ひて以來進んで子規風味の俳流に牛耳を取らんとするものなきが如し<sup>12</sup>

実際に香墨最後の台湾任地である台南俳壇を見ると中南部の俳句界にはまだまだ旧派のほうが勢力があったことが分かる。香墨を失ってから台南の俳壇は再び香風吟壇という旧派の勢力が盛りかえした。当地における新派俳句の振興は、杉坂牛魔など『相思樹』派俳人の出現や「菩提子会」の成立を待たねばならない<sup>13</sup>。

### 3. 中央俳壇への進出

台湾最初の俳句雑誌『相思樹』は『ホトトギス』の紹介により、その存在を日本の俳句界に知られるようになった。明治37年（1904）6月号の『ホトトギス』巻末の新刊紹介に「相思樹 一ノ一 台北 竹風吟壇」とその創刊号の消息が載って以来、『相思樹』の新刊が発行される度にこの新刊紹介の欄で宣伝された。また募集課題句や「地方俳句界」などの投句コーナーや投稿文章などにも台湾俳人の活躍が見られた。ここでは『相思樹』の創刊された明治37年（1904）から明治39年（1906）9月まで『ホトトギス』誌に採録された『相思樹』同人の作品に注目し、台湾の俳句が中央俳壇にどのように認識されていたのかを検討する。まずはこの時期に最も入選数を誇る藤井烏榎<sup>14</sup>という俳人の作品を見ておきたい（『ホトトギス』募集課題句より）。

水牛の角にたばしる霰哉 (明治37年4月) 烏 韃

「水牛」は昭和期においては「椰子」に次ぐ俳材として台湾俳句によく詠まれたが、明治期はまだ馴染みのない素材であった。台湾の季題を集めた最初の歳時記である小林李坪の『台湾歳時記』は水牛について次のように述べている。

水牛は黄牛に比して伶俐であつて、且つ奮怒する時は危険が多い、然かし又愛情は濃厚であつて、牧童は之を愛すること犬の様である、又平素見馴れぬものを見る時は、奇異の聲を放つて鳴き、或は之を襲撃することがある、又頗る水を好んで、陽熱酷しい時には、常に泥中に轉んで、全體に泥を塗り、或は水に没して、頭若くは鼻のみを水上に出し、數時間に亘ることがある、之れ水牛の名ある所以である<sup>15</sup>。

霰が水牛の角に激しく飛び散る——水牛の鋭い角を素材とする句は後に頻出するようになったが、水牛の角に着目したのは烏韃の句が初めてであろう。水牛は普段は大人しいが、危険を感じると鋭い角を前に突き出して相手を威嚇する習性があるので、当時内地からの移住者はこの水牛を興味深く観察する一方、一種の恐怖を覚えていた。『ホトトギス』に収録された香墨の「一週記事」にも水牛を見かけると思わず道を空けてしまうという作者の経験談が述べられている<sup>16</sup>。

麗かや彩色匂ふ寺の門 (明治38年4月) 烏 韃

豚群れて家あるを知る夏野哉 (明治38年8月) 同

「麗かや彩色匂ふ寺の門」は台湾の廟を題材とし、柱などは赤や金色などを施し、極めて煌びやかなのが特徴である。「彩色匂ふ」の中七が台湾の廟の鮮やかな外観を上手く表現している。「豚群れて」は生活の実感に基づく、平明な描写の句である。以前は家畜は野飼いにされていたため、群がる家畜を目にすると、人家が近くにあることが分かったのである。

桔梗ホンツウイ ショウキムや風水に焼金す (明治39年9月) 烏 韃

「風水とは墓地なり」と注記してある。「風水」も「焼金」も台湾名のルビが付けられ、それぞれ「ホンツウイ」「ショウキム」と発音する。「焼金」について『台湾歳時記』は「臺灣人の神佛祖先を祭らんとするや必ず金銀の箔紙を焼くの例である、其の理由は在天の神佛祖先の靈に、金銀貨幣を寄送するの意を寓するのである、彼の賽銭奉納と稱する、内地の現生主義に比すれば頗る高雅である」と説明している<sup>17</sup>。墓地で先祖に献げる箔紙を焼くその行動を、「風水に人焼金す」と土俗名そのままに句に取り入れることは大胆かつ革新的な試みである。一句全体生硬な感じは免れないが、外国語(閩南語=台湾語)の発音を用いることで一種のエキゾチックな情趣を醸し出している。烏韃は台湾の素材を巧みに募集課題に取り入れ、地方俳人としてかなりの評価

を博したばかりではなく、中央俳壇に台湾への認識を広げた。

『ホトトギス』に採録された台湾句会の作品は上記の竹風吟壇の他に「むらさき会」「苦吟会」「くろがね会」「南溟会」などが見え、すべて『相思樹』関係者によって発起された少人数の地方句会であった<sup>18</sup>。

#### 4. 同人の作品

『相思樹』が刊行された2年目にして、台湾の自然に触れながら現地の人々と接した異文化の体験に基づく作品が段々と増えてきた。それまでは日本での生活を回想して句を詠むことが多かったのに対して、『相思樹』創刊後は台湾の素材を使って句を作るべきだという声徐徐に高まり、生活の実感を忠実に表現する作品も詠まれるようになった。では当時の俳人はどのような台湾の素材を詠んだのか。『相思樹』第2巻1号から6号までの詠句から、当時の台湾の雰囲気や巧みに捉えた作品をいくつか紹介し、その俳人の表現力と関心の対象を見ておく<sup>19</sup>。

洗骨の壺あらはなり夏の草 烏 韃

「洗骨」は土葬して数年経つと、遺体を墓から取り出し、残った肉をきれいにこそいで、骨を洗う儀式のことで、台湾ではこれを撿骨（ジェンゲー）という。骨を酒で洗い、壺に納める第二次葬である<sup>20</sup>。烏韃の句から、洗骨の壺が無造作に墓場の叢に放置され、夏草のみ生い茂るばかりの荒涼たる風景が感じ取れる。

隣庄の普度の鐘や更けにけり 烏 亭

「普度」（普渡）とは「世間一般に存在する無縁無祀の孤鬼を普く濟度する<sup>21</sup>」ことを目的とする民間信仰であり、日本の「盂蘭盆」「施餓鬼」のような行事である。亡くなった先祖や孤独な霊達にご馳走をするために旧暦の7月に家々では肉や魚、果物、菓子などを準備して自宅前でお供えして祭る。田舎などでは同じ庄内の人と一緒にすることがあり、大変賑わう。「隣庄の普度の鐘や更けにけり」の句は、死者の霊を慰め、弔う隣村の鐘の音が、夜が更けても聞こえてくる、の意であり、鐘の音は人々の心を打つものがあり、自然にそれに耳を澄ましたのであった。

秋暑し市に吐きすつ檳榔子 瓦 全

檳榔は熱帯アジアや南太平洋諸島で広く栽培されるもので、檳榔子（ビンロウジ）をキンマの葉に包んだものを噛むとちょっとした興奮感が得られる。普通は真っ赤な唾液を飲み込まず吐き捨てるため、台湾の道路には赤い吐き出した跡が見られる。「秋暑し市に吐きすつ檳榔子」は残暑厳しい中、市場で吐き捨てられた真っ赤な檳榔子の残渣を目にしたことよ、の意で、ありのままの光景を表現した一句である。

枝ながらレンブ贈りしやさしさよ 楊 亭

レンブ（蓮霧）の味は淡白で微かな甘味や酸味がする。一本の細い枝にたくさんの花が咲き、実がなる。枝にびっしりと何個もの実が付いているので、昔の台湾では枝についたままのレンブを買うことができた。瑞々しいレンブが数個付いている枝を切り取って送ってくれた友人のその優しい気持ちがありがたく、心に染みる。

上述の数句は台湾の素材をテーマに詠んだ句であり、その数は全体から見て決して多くはないものの、台湾の自然・人事を率直に表現した点において評価すべきであろう。台湾の俳句は『相思樹』同人の努力によって次第に発展していった。明治37年（1904）から39年（1906）9月までの、前期『相思樹』の発展とその作品は上記の通りである。この3年間は『相思樹』の最も華やかな時期で、旧派と対抗しその影響力を全島に広げ、台湾俳壇においても日本俳壇においてもその存在を大いにアピールした。

## 第2節 岩田鳴球の來台と竹風吟壇の分裂

### 1. 岩田鳴球の來台

明治38（1905）年1月、岩田鳴球（32才）が三井物産の台湾支店長として再度渡台した<sup>22</sup>。鳴球は明治33年（1900）以来、ホトトギス派の東京例会に参列し、また十句集<sup>23</sup>にも参加していた。渡台の際に、高浜虚子から小川尚義宛の紹介状を貰ったほど、虚子の元で俳句の修行を積み、虚子門として一目を置かれる存在であった。当然ながら鳴球が台湾に転勤すると、一躍して香墨と並ぶ台湾俳壇における指導者的位置を獲得し、『相思樹』の選者にも推挙された。同年2月5日に藤井烏榘の庵で南蛮會主催の鳴球歓迎句会が催された。参会者には岩田鳴球、加藤申衣、山田不耳、服部烏亭、堀尾空鳥、津田楊亭そのほか、全部で23名を数える盛況ぶり、鳴球に寄せた台湾俳人の期待の程が窺える。鳴球も虚子門の有力俳人として台湾俳壇の革新に意欲を見せた。鳴球の影響を強く受けた『相思樹』第3巻11号には以下の宣言が載せられ、『相思樹』同人の台湾俳句に対する抱負の一端が窺える。

- ギボギボの霸王樹を横断すると美しい木質があらはれる、こんな句が臺灣にほしい
- 巒大山の檜を伐り倒すと太古の響きが満山に反響する、こんな句が臺灣にほしい
- 小山の様な水牛が泥だらけの背を藪の竹にすりつけると、竹と竹がすれあつてキビキビと鳴る、こんな句が臺灣にほしい
- 濁水溪の黒流逆に渦巻いて遠く夕焼けの芒の中に流れ入る、こんな句が臺灣にほしい

しかし鳴球は、俳句の質の向上と俳句研究という名の下に当時の台湾俳人の作句を酷評した。その批判的研究態度は一部の同人の支持を得たが、彼の毒舌ぶりに反感を覚えて『相思樹』を離れた俳人達も少なくなかった。特に香墨が健康上の理由で（彼は以前から腸の病や、アミーバ赤

痢などに患わされていた）翌年の2月に台湾を離れてから（『俳人渡邊香墨』は香墨の離台を明治39年（1906）2月29日とする）、虚子の教えを直に受けた鳴球が台湾俳壇の第一人者となり、『相思樹』の主導権を握るようになった。一方、日本に帰った香墨はその年の4月にかねてからの願いが叶って、依願免官になり、以後再び台湾の地を踏むことはなかった<sup>24</sup>。

## 2. 竹風吟壇の分裂

鳴球は明治39年（1906）5月より『中部台湾日報』において、台湾俳人の作品に対する評論を目的とする「白頭鵠」を連載しはじめた。元々句評である以上、俳句の質の向上には幾分功労があったのではあるが、忌憚なく台湾俳人の作品を酷評したために多くの俳人の怒りを招いた。

『相思樹』陣営にも鳴球に反感を持つ会員が続出し、作句が面白くなくなり俳句から離れていく者もいた。例えば創刊発起者の5人のうち、最も熱心な空鳥がまず『相思樹』を離れ、鳴球に対する痛烈な批判の声をあげた。また蝸居も『相思樹』を退会し、そして眼病のために俳句を辞めた。創刊以降ずっと『相思樹』の会計を勤めていた申衣は幹部を辞退し、選者の一人である李坪は仕事が多忙という理由で選者をやめ、竹風吟壇の句席からも姿を消した。編集者の烏亭のみが独自孤墨を守る感じで、『相思樹』内部紛争の解決に向けて和解の道を探った。

脱会者たちは、『台湾日日新報』を拠点として活動するようになった。元々旧派の俳諧の発表の場である「日々俳壇」は、空鳥や李坪などの有力な新派俳人の加入により、規模を拡大して『相思樹』陣と相拮抗できるほど成長していた。そして「日々俳壇」に投稿する新派俳人は、李坪、空鳥などを中心に明治40年（1907）5月に緑珊瑚会を結成した<sup>25</sup>。

## 第3節 後期『相思樹』（鳴球主筆時代）

### 1. 編者の交代と発行所の移転

香墨が台湾を離れ、李坪らが『相思樹』を抜けると、鳴球は実質的に主導権を握るようになった。明治39年（1906）後半から休刊となる明治44年（1911）までの『相思樹』の軌跡を後期『相思樹』（鳴球主筆時代）とし、この時期の句会の動向を次に整理しておく。

まず明治41年（1908）10月（第4巻7号）より『相思樹』発行所は彰化に移り、発行者も迂骨（那須伊波保）に変わった。迂骨は相思樹派の中部支社瓊霧郷に所属した。主要会員に石城、迂骨、鐘堂、八面峰などがおり、鳴球を指導者として仰いだ。烏亭に代わって『相思樹』の編集になった迂骨も鳴球から俳句の手解きを受けた一人である。

「竹風吟壇に殉死と決心した大忠臣<sup>26</sup>」と空鳥に揶揄された服部烏亭がなぜ『相思樹』の編集を辞退したのか。原因はやはり『相思樹』の没落と、鳴球一派に雑誌の主導権を握られたからであろうと推測できる。当時の事情を伝える記事として次に挙げておく。

雑誌相思樹第三巻第一號に入、不耳沐浴齋戒、筆を按して一文を草す、題して駄舌録と云ふ、敵も味方も其穩健なるに服す、然るに獨り烏亭憂色あり、鳴球先生の忌憚に觸るゝの恐

れありと稱し、遂に縛して六號に附し、爲にヤンチャ街談を設けて禁錮す、ヤンチャ街談侮辱事件是なり、近者不耳の作の紙上に顯はれざる所以のもの、蓋し故なきにあらざるを知ることが出来る。烏亭の小策は、屢々相思樹を誤ることがある、「鶉川」の殘黨華園とか云ふ男を雇つたのも又其一つである。

(三十六禽(空鳥)「俳壇グ話<sup>27)</sup>)

僕は香墨が曾てありし如く鳴球が臺灣に於ける、最健全なる俳人たるを信ずるが爲めに相思樹俳壇に其力を借る事は渺くない、是は相思樹同人の俳趣味を進歩せしむるに有力な標準と信じて居るからである然し未だ曾て同人の相思樹を捧げて鳴球の雑誌たらしめた事はない。

(烏亭「寄空鳥《上》<sup>28)</sup>)

『相思樹』は第3巻1号より改版し、誌面を大幅拡張し、雑吟句数だけでも2000数句を発表した。山田不耳の「馱舌録」と題する一文は元々3巻1号に入れられる予定であったが、その内容は『相思樹』内部の問題点を指摘し、鳴球一派を批判するものであったため、6号に変更された。その理由を空鳥は「鳴球先生の忌憚に觸るゝの恐れあり」と、烏亭が鳴球の怒りを憚るからであると説明した。それに対して烏亭は、不耳の文章は感情的で穏やかなものではないために6号に入れたと反論した。このように編集上の種々の忌憚と竹風吟壇内部の紛争は明治40年(1907)から次第に表面化し、「小心翼翼の器兼性苦勞質」と空鳥に評された烏亭は終に編集の座から下りて、鳴球一派に『相思樹』編集の任を任せたのである。

烏亭の後を次いで編集に就いたのは前述の通り迂骨という俳人であるが、その任期は第4巻第12号(明治42年5月号)までである。第5巻からは台南の牛魔(本名杉坂六三郎、台南の田螺会に所属)が編集の任に当たっていたことが推測される<sup>29)</sup>。このように発行所が転々と移され、編集も同人の間に回されたことから、『相思樹』の運営が次第に不安定に陥ったことがわかる。発行所が中南部からようやく台北に戻ったのは第5巻第3号(明治42年10月号)以降である。編集者は樵山(土井友芳・鉄道部書記)であり、その任は第6巻第4号(明治44年2月号)まで続く。

『相思樹』第6巻から雑詠の選者陣に北川洗耳が加わった。洗耳は金沢俳壇において名のある俳人であり、彼が渡台を決意したのは「臺灣の句會を開發振作する爲に」旧識の鳴球の計らいで『台南新聞』に雇われたためである<sup>30)</sup>。第6巻1号より4号までの雑詠は鳴球と洗耳の隔選となった。洗耳の加入により『相思樹』が不振から立ち直り、新生面を切り開けると期待した鳴球の思惑が読み取れる。洗耳は雑詠選者のみではなく、『相思樹』第6巻第4号(明治44年2月号)の「移植の事」一文によると、5号から樵山の後継として編集を引き受けることになったことがわかる。

今回本誌を再び臺南に移植する事と相成申候、臺南に於ての本誌の經營は、洗耳君専ら主幹として編輯の事に當り、鳴球君は參謀として、其他尚ほ星橋、笑風、夕蟬井の諸君相援け

らるゝ筈に有之候、而も内地諸俳豪との連絡は益々多方面に涉りて、潑刺たる意氣の下に清新なる趣味の充實せる好個の俳誌たるべき事は三月以降の本誌が實地に於て之を證明する次第に御座候<sup>31</sup>

樵山が編集の座から降りたのは「生活的職務に基く時間の壓迫<sup>32</sup>」、つまり生活の多忙が主な原因であるが、彼は烏亭について任期の長い編集者となった。そして『相思樹』の刊行運営は台南の洗耳が主幹として引き継ぐはずであったが、第6巻5号が刊行されることはなく、明治の終焉まで『相思樹』は休刊のままとなった。

## 2. 後期『相思樹』の歩み

後期の『相思樹』は編集者が数度交代したが、「俳句」と「文章」の二大主軸は維持されている。雑詠と課題句などは毎号募集され、また俳人の秀句・文章も掲載された。

明治40年時代に河東碧梧桐が提唱した新傾向俳句は異常な人気を獲得し、全国を席卷する勢いを見せた中、台湾でも河東碧梧桐の來台を機に、李坪や空鳥らによって発起された緑珊瑚会が碧派の句会に転じ、碧梧桐の唱導する新傾向の俳句をめざして、固定した季題趣味から脱しようとして模索し努力した。それに対して、『相思樹』同人は新傾向に興味を示しつつも、ホトトギス系の俳誌を標榜し、旧派俳人を大量に受け入れた緑珊瑚会の「来る者拒まず」の方針を痛烈に批判した。中心人物の鳴球は、一面においてはその傲岸不遜な態度のため多くの俳人の反感を買ったが、三井物産会社の台湾支店長として在台10年、台南、彰化、台中など中南部に住居を構える度に当地の句会を指導し、地方俳壇の発展に尽力した功績もまた看過できないであろう。

後期『相思樹』時代は作句の面において、樵山が編集を勤めた時期に雑詠・課題詠のほかに、「一題百句吟」や「互評俳句」などの募集も試みられた。一題百句吟は一つの題に対して百句を出句することであるが、選者が内地著名俳人の小沢碧童ということもあり、当時は少数の熱心者が作句していたが、その後は何の消息もなくなった。互評俳句欄は「雁来紅」と言い、樵山企画の俳句コーナーとして比較的人気を博していたものの、第6巻に入ってから投稿者は激減した。最も重要な募集俳句も常に10名に満たない応募者のみで、毎号課題を広告することが殆んど儀式的に行われ、『相思樹』は後期になって急激な不振に陥った。

後期『相思樹』は編者が度々変わり、発刊も不定期になっていたが、地方句会にはいくつか特筆すべき動きがあった。その中でも北部の基隆に在住の俳人を中心に開始された「台湾五句集」の集会和、中南部の俳人が主になって発起した「涼樹傘」句会が同人を引率する力となっていた。

「台湾五句集」は『相思樹』系俳人の吉川五平太、山本風雨楼（常之助）など基隆在住の俳人によって発起された集まりである<sup>33</sup>。各地の俳人が活発に投稿したこの句会の詠句は『相思樹』に多く掲載され、投句者の作句力の高さが目を引く。上記2人の他に、貫城、北攝、迂骨、迂世丸、鐘堂、宙洋、八面峰、鎮西郎、塩村、霞堤、烏亭、枕流、芋作なども熱心に投句していた。「台湾五句集」で選出された句は『ホトトギス』にも紹介され、明治後期の台湾におけるホトトギス派の勢力を示す存在となった。

阿部誠文の「台湾俳壇史」は、2回連続で『ホトトギス』に採録された「台湾五句集」に触れ、迂世丸の「獺曳の出て行く跡に泣く子かな」と貫城<sup>34</sup>の「舞猿や蜜柑をかくす陣羽織」二句を紹介した後、「正月の猿廻しを詠んだ句であろう。明治42年の新年を期して基隆では、初めての句会として、ささやかな産声をあげたのである」と説明した<sup>35</sup>。「台湾五句集」の成立は明治42年ではなく、明治41年である。『ホトトギス』42年3月号の最初の記録は、「台湾五句集」第6回の集会で詠まれた作品であり、題は「猿引」で出句者21名、選者18名である。互選結果13点貫城、10点五平太、9点風雨楼、7点北撰、石城、6点小茶、4点迂世丸、3点迂骨、2点鐘堂・宇洋、1点宜南・岳樵となっている<sup>36</sup>。

台湾北部の基隆には上述のように「台湾五句集」の風雨楼と五平太など『相思樹』同人がいる他、緑珊瑚系の青甫などの有力俳人がいた。明治41年(1908)頃、当地に「二二吟壇」が結成された。この二二吟壇は緑珊瑚会の俳人が主体となり、明治43年(1910)2月号の『ホトトギス』にもこの句会の記録が載っている。風雨楼のような、竹風吟壇と緑珊瑚の仲直りを願う竹風吟壇の同人も参加していた。阿部誠文は前述の台湾五句集に関する2回目の連載で結論として次のように述べている。

そして、台湾五句集の創設者、中心的俳人と目される風雨楼は、同じ基隆に、二二吟壇を結成した。その二二吟壇の記録が、翌月である明治四十三年二月号(筆者注:『ホトトギス』地方句会報を指す)に載っている。そこには、今までのメンバーは一人も参加せず、台湾俳壇で初めてみえる青甫と風雨楼の名のみみえるだけである。風雨楼は、自ら作った台湾五句集の俳人と袂別したのである<sup>37</sup>。

この記事によると、風雨楼は自らが作った台湾五句集の俳人と袂別して、明治43年(1910)頃に基隆に二二吟壇を結成した、ということになるが、二二吟壇の記録は明治41年(1908)年5月の『緑珊瑚』1周年記念号にも見えるので句会の設立もそれ以前のことであると思われる。『緑珊瑚』に二二吟壇の句会報を書いたのは「青甫」であることから、彼が句会の中心人物であることが分かり、他に露村、八洲、硯水、周陽などがいる。「風雨楼は、自ら作った台湾五句集の俳人と袂別したのである」と阿部誠文は断定しているが、風雨楼は明治42年(1909)12月には既に逝去しており、明治43年(1910)1月号の『ホトトギス』句会報に見える台湾五句集が台湾五句集最後の記録となったのは、風雨楼が盟友と袂別したためではなく、風雨楼の死により台湾五句集が解散もしくは中止になったからと見て良からう<sup>38</sup>。

『相思樹』系の句会として、台北の「竹風吟壇」の他に、荔枝郷(台北)、常夏会(台北)、滬尾吟社(淡水)、涼傘樹会(台中)、土荳会(台中)、千李会(台中)、璉霧郷(彰化)、薰風郷(楊梅壠)、猿酒会(埔里社)、菩提子会(台南)、田螺会(台南)、龍眼会(南投)、鳳梨会(鳳山)などが挙げられる。その中で台中の涼傘樹会には『相思樹』発起者の一人である芋作も参加している。主要メンバーは他に沢谷星橋、田口八面峰などがおり、また日本にいる瀧丘(遠矢良茂)なども投句している。涼傘樹会は第13回より『相思樹』(第6巻3号)と合併し、独自の小冊子

の刊行は中止となった。しかし『相思樹』は第6巻第4号以降休刊に入ったため、明治期における涼傘樹会の作品は、『相思樹』第6巻3号が最後となった。

#### 第4節 『相思樹』の終焉

縷々述べてきたように、後期の『相思樹』は投稿や投句の量において不振に陥り、存続が問題となった。その兆しは第5巻の改巻号からすでに見え始め、改巻号であるのに、全巻の約半分が主幹の鳴球の「琥珀帖」という7年前の日記で頁数を埋め合わせていた。『相思樹』第5巻第1号に「青夢曰く相思樹はもう出ますか○鳴球曰くまだ出ないね○へとら曰く相思樹はやめるのですか○鳴球曰くやめないね○牛魔曰く例の通り休刊か○鳴球曰く出る時には出るが…しかしやるさ人にやるさ○鬼空定の定日に出すのは月並じや○鳴球曰くさうでもあるまい」と同人の会話からも窺えるように、内容の問題のみではなく発刊も遅れがちになり、関係者の間でも『相思樹』がいつ休廃刊になっても不思議ではないという心構えはあった。

『相思樹』の不振による廃刊の兆しが濃厚になってきた中で、有力メンバーで且つ『相思樹』の経済的後援者の一人でもある実業家の吉川五平太が「相思樹改善案」と題する一通の手紙を鳴球に寄越した。これは台湾最初の俳誌である『相思樹』の衰微を「非常の痛恨事」と感じた同人吉川五平太が、何とかして『相思樹』を再生させようとした提案である<sup>39</sup>。雑誌編集の難点は「主幹者の多忙なる境遇」「会員一同不熱心」「会計の困難」三点にあると分析し、それぞれ対応策が考え出された。

五平太の手紙は『相思樹』の経営問題を鋭く指摘している。まず「主幹者の多忙なる境遇」について、当時の編集は彰化の迂骨であり、彼が編集を降りた原因は不明であるが、5巻3号以降は台北の樵山が編集を引き継いだ。樵山は編集後記において繁多な仕事の時間を割いて編集することが困難になったことを述べ、鳴球の計らいで樵山の後継者として洗耳が金沢より招致されたが、洗耳の手による『相思樹』の刊行はなされていなかった。

次の「会員一同不熱心」は、おそらく『相思樹』の存続の危機にある一番の根底的な原因である。当時は新傾向俳句を標榜する緑珊瑚会が『台湾日日新報』を拠所にし、多くの俳人の支持を得ていた。緑珊瑚会勢力の勃興と対照的に『相思樹』はますます下降気味になっていったのである。また会員の減少に伴う収入減が深刻な問題として浮かび、「会計の困難」が悩みの種となっていた。

「相思樹改善案」を進言した二年後の明治44年（1911）9月に、五平太は南部旅行中濁水溪架橋通過の際橋より墜落し、病院に運ばれて手当を受けたが手遅れで42歳の生涯を閉じた。早世の英才を哀悼して『相思樹』は五平太記念号の刊行を企画したが、種々の原因で発行が遅れて、結局大正5年（1916）8月になってようやく刊行された。この五平太記念号が『相思樹』の終刊号となった。

## おわりに

如上をまとめると、以下のようなになるだろう。台湾における俳句受容は、旧派も新派もほぼ同時期に並行して流入してきたと言える。初期の台湾俳壇は『台湾日日新報』の俳句欄「日々俳壇」の選者を勤めた窓雨などの旧派宗匠がリードしていたが、『ホトトギス』が創刊されると子規の俳句革新の主張を賛同する台湾俳人が増え、台湾の風物を読み込んだ句を『ホトトギス』に発表した。そして子規の高弟である香墨の台湾赴任により、新派俳人は良き指導者を得て、俳誌『相思樹』の発刊を決定したのである。

『相思樹』の史的意義について、まず台湾における最初の俳誌としての重要性を評価すべきである。台湾の俳句受容史を語る上で『相思樹』の功績を逸することはできないし、また俳句の海外伝播史を研究する上でも『相思樹』は好資料となるはずである。洗耳が「蕃木瓜」において「是迄に臺灣句界を草創し、幾何かの俳人を作ってくれた香墨、鳴球、李坪等の諸氏には多大な尊敬と感謝とを拂はねばならぬのは勿論である<sup>40</sup>」と述べたように、『相思樹』の選者だった香墨・鳴球・李坪の3人は『相思樹』を通して明治期台湾俳句界の基盤を作ったと言っても過言ではない。また作品の面において台湾俳句には異文化の交流と融合が見られる。内地趣味ではなく台湾特有の季題趣味を研鑽しはじめたのも『相思樹』の俳人であり、その集大成が明治43年(1910)に出版された李坪の『台湾歳時記』である。

本稿は、『相思樹』の果たした歴史的役割を明らかにしようと試み、台湾における俳句受容の一面を考察した。季題の問題を含め、明治期の台湾俳句についての研究は大変興味深い課題ではあるが、紙幅の都合により詳細に述べることを避けた。俳人の足跡や作品の特色、そして明治期の台湾俳壇の全貌などの問題についての考察はまた別稿に譲りたいと思う。

## 注

- 1 島田謹二「台湾に於ける写生派俳句の先達－外地文学雑話(2)－」(『文芸台湾』、1941年11月号、58-63頁)。
- 2 島田謹二「正岡子規と渡辺香墨」(初出『台湾時報』1939年5月号)、「続香墨記」(初出『台湾教育』1939年8月号)二編の論文は『華麗島文学志－日本詩人の台湾体験－』(明治書院、1995年)に収録されている。
- 3 渡辺香墨は本名助治郎、慶応2年(1866)5月27日茨城県稲敷郡原村に生まれ、少年時代は故郷にて寺子屋教育を受け、後上京私立東京法学院(法政大学の前身)を卒業。検事・判事・台湾総督府法院検察官などを歴任。明治45年(1912)12月18日に歿。
- 4 『台湾民報』は明治33年(1900)8月8日から明治37年(1904)3月29日までに台湾で発行された日本語新聞であり、当時台湾無二の民権新聞として政府当局を悩ませていた。代表者は『相思樹』中心人物の吉川五平太の次兄に当たる中村啓次郎である。
- 5 服部烏亭「寄空鳥《上》」(『台湾日日新報』、1907年5月3日)。
- 6 吉川五平太は本名栄三郎、明治3年(1870)7月に和歌山紀伊国和歌山市に生まれる。明治29年(1896)4月に石田商店員として渡台、基隆に開店し回漕業及び石炭業に従事。開墾事業や炭鉱事業、コークス製造業などに着手。明治44年(1911)9月に南部旅行中濁水溪架け橋より転落し12日に死亡、享年42歳。
- 7 鳴球は、本名岩田久太郎、石川県の出身である。大正4年(1915)に離台し、大正7年(1918年)に大本教に入信。大本教弾圧により昭和11年(1936)に獄中に病死した。
- 8 市毛豊備著『俳人渡邊香墨』(双樹社、1952年、25頁)は渡辺香墨の離台を明治39年(1906)2月19日と

する。

- 9 「南蛮会」は明治33年（1900）秋に香墨居で開かれた句会の席上にて結成された新派結社である。
- 10 残夢庵窓雨は名古屋の出身で、本名高橋鋼太郎。明治30年（1897）6月に渡台し、旧派の宗匠として多くの俳人を傘下に集めていた。昭和6年（1931）4月26日台湾にて歿。
- 11 前掲『華麗島文学志』、169-212頁。
- 12 北鳴「台南の文芸界」（『台湾日日新報』、1907年1月26日）。
- 13 句若翁は「俳壇小語（203）」（『台湾日日新報』、1909年11月23日）において台南に赴任した烏髯の手紙を紹介し、「法院の同人で組織した菩提子會と云ふのがあります一月一回の開會で既に二十幾回を閲みしたと云ふことです先月の例會にも出席を請はれましたが折しも上府したので違約しました今日の會には電話での督促寸時を割いて出馬しました會者は十名餘濟々多士と云ふべきで就中星橋は一頭地を抜くものにて小子の選句五句中の四句は同子の作でした」とあるので、菩提子會は月に一度、既に20数回の開會ということから推算すると句会は遅くとも明治41年までに既に成立したことが分かる。
- 14 藤井烏髯、本名藤井乾助、広島生まれ。台湾覆審法院判官、台南地方法院院長などを歴任。歌人でもある。
- 15 小林李坪『台湾歳時記』、政教社、1910年、124-126頁。
- 16 渡辺香墨「一週記事」（『ホトトギス』、1901年4月号、34-38頁）。
- 17 小林李坪前掲書、19-21頁。
- 18 『ホトトギス』の地方句会報に収録された台湾句会の作品については阿部誠文の前掲連載に詳しい。
- 19 例句は『台湾慣習記事』第6巻（1906年）第3号及び第8号に紹介された『相思樹』の作品から引用した。
- 20 鈴木清一郎『台湾旧慣 冠婚葬祭と年中行事』、台湾日日新報社、1934年（復刻版、南天書局、1995年）。
- 21 小林李坪前掲書、201-204頁。
- 22 『岩田鳴球追悼録 琥珀のかけら』（中野三允編・川島紫水印写、このみづ会出版、1938年）によると、鳴球は明治29年（1896）3月に友人露風と共に守備隊の酒保商人として渡台した。これは鳴球の第1回の台湾行、29歳の時であった。
- 23 「十句集」（一題十句）とは一つの題に十句を出すという、子規が考案した試みで、やがて子規庵に行われた句会の参加者にも採用され、十句集、回覧式十句集も始まった。特に回覧十句集は非常に盛況で、参加希望者も多かった。
- 24 明治39年（1906）に香墨は台湾を離れて退官し、故郷で病の療養をしていた。明治41年（43歳）12月に補仁川区裁判所検事として朝鮮に渡り、明治44年（1911）療養のために帰国して翌年に病死した。
- 25 緑珊瑚會は成立1周年を記念し、明治41年（1908）5月に『緑珊瑚』一周年記念号を発行した。二周年記念号（明治42年7月発刊）などを経て、『緑珊瑚』は明治43年（1910）年より年刊から月刊へと変わり、そして月刊第1号は8月に刊行された。
- 26 『台湾日日新報』、1907年10月17日の「新刊紹介」より引用。
- 27 三十六禽（空鳥）「俳壇グ話」（『台湾日日新報』、1907年4月30日）。
- 28 服部烏亭「寄空鳥《上》」（『台湾日日新報』、1907年5月4日）。
- 29 第4巻第11号の消息には「發行所臺南移轉は都合により來號より致候」とあるが、論者の手元にある第12号は依然として璉霧郷（彰化）になっている。巻末の消息によると、「本號は三種郵便物認可取消豫防として發行春の雜吟はすべて改巻號に譲り申候」とあるので、台南移轉は第5巻改巻号以降になると推定される。
- 30 樵山は『相思樹』第6巻第1号の「消息」に松下紫人の「俳人洗耳」（『金沢北国新聞』）と題する一文を載せ、更に「過般鳴球が歸省の途に就かる、砌、台湾句界の爲め兼ねては本誌の爲に相當造詣あるの士を拉し來るべきの約有之候、頃者臺南新報上に雄健の筆を揮はれつゝある北川洗耳君は即ち其拉せられたるの士にて先月下旬日渡臺せられたるものに御座候」と洗耳の紹介を特筆したことなどから、鳴球が洗耳の力を借りて『相思樹』の振興を計ろうとしたことが分かる。
- 31 土井樵山「移植の事」（『相思樹』第6巻第4号、1910年、25-27頁）。
- 32 前注参照。
- 33 第6回台湾五句集（『相思樹』第4巻第11号所収）の募集課題は「猿引」、投稿所は「基隆蚵殼港吉川五平太」となっていることから、五平太がこの句会の中心人物であることが分かる。
- 34 「台湾俳壇史（五）」は「貴城」と表記しているが、「貴城」が正しい。
- 35 阿部誠文の「台湾俳壇史」は第5回第6回（『燕巢』2000年7-8月号）の連載で『ホトトギス』に収録された「台湾五句集」の作品（全9回）を紹介した。

- 
- 36 「台湾五句集」第6回の記述は『相思樹』第4巻第11号(1909年3月号)39頁に載せられている。
- 37 阿部誠文「台湾俳壇史(六)」(『燕巢』、2000年8月号、39頁)。
- 38 『ホトトギス』明治43年(1910)1月号の台湾五句集の記録と2月号の二二吟壇句会報における風雨楼の句はその生前に投句したものである。
- 39 吉川五平太「相思樹改善案(鳴球宛)」(明治42年(1909)4月27日付)は「大正5年終刊号及び五平太記念」(70-71頁)に収録されている。『相思樹』終刊号は大正5年(1916)に刊行されたが、追悼文章の内容は殆ど明治45・6年に執筆されたものである。
- 40 北川洗耳「蕃木瓜」(『相思樹』第6巻第1号、明治43年9月、8-10頁)。